NO. 36

タイ国日本語教師隊員
巡回指導調査団報告書

平成 11 年 2 月

JICA LIBRARY
J 1154895 [5]

国際協力事業団

青派一
JR
98-04

タイ国日本語教師隊員巡回指導調査団報告書
平成11年2月

922
16.5
JVO
RARY

タイ国日本語教師隊員
巡回指導調査団報告書

平成 11 年 2 月

国際協力事業団

1154895 [5]

序　文

青年海外協力隊事業は、発足以来34年目を迎え、隊員の派遣数は17,000人を超え、派遣国は６０カ国近くとなっています。

タイ国への協力隊派遣は協力隊事業全体から見れば歴史は浅く、1981年に始まり、今年で18年目になります。開始以後これまでに約350人の隊員を派遣してきましたが、派遣の中心分野を占めてきたのは日本語教育分野です。タイ国への日本語教師隊員の派遣は、協力隊派遣開始とほぼ同時に始まりましたが、これまでに約70名の日本語教師隊員が活動してきました。これは全派遣数の20%にあたり、他の派遣分野と比較しても大きな数字を示しています。配属先には、高等学校や技術・職業訓練校のような中等教育機関も一時含まれていましたが、現在は首都圏、地方の大学といった高等教育機関への協力が中心となっています。どの配属先においても、学習者の意欲は高く、隊員自身の努力もあり、協力活動の効果は着実に浸透しつつあります。

これらの経緯を踏まえ、当事務局は平成10年11月15日から11月25日までの間、日本語教師隊員巡回指導調査団をタイ国へ派遣しました。その目的は、現在の日本語教師隊員の活動進捗状況を調査し、効果的な派遣方針を検討することによって、今後の協力をさらに実効あるものにすることです。

本報告書は、同調査団による調査結果を取りまとめたものですが、今後の同国における日本語教師隊員の協力指針となり、広く関係者に活用されることを望みます。

最後に、タイ国へ派遣された隊員を始め、関係各位のこれまでの努力と成果に敬意を表すると共に、今回の調査にご協力いただいた方々に対し、心から感謝の意を表する次第です。

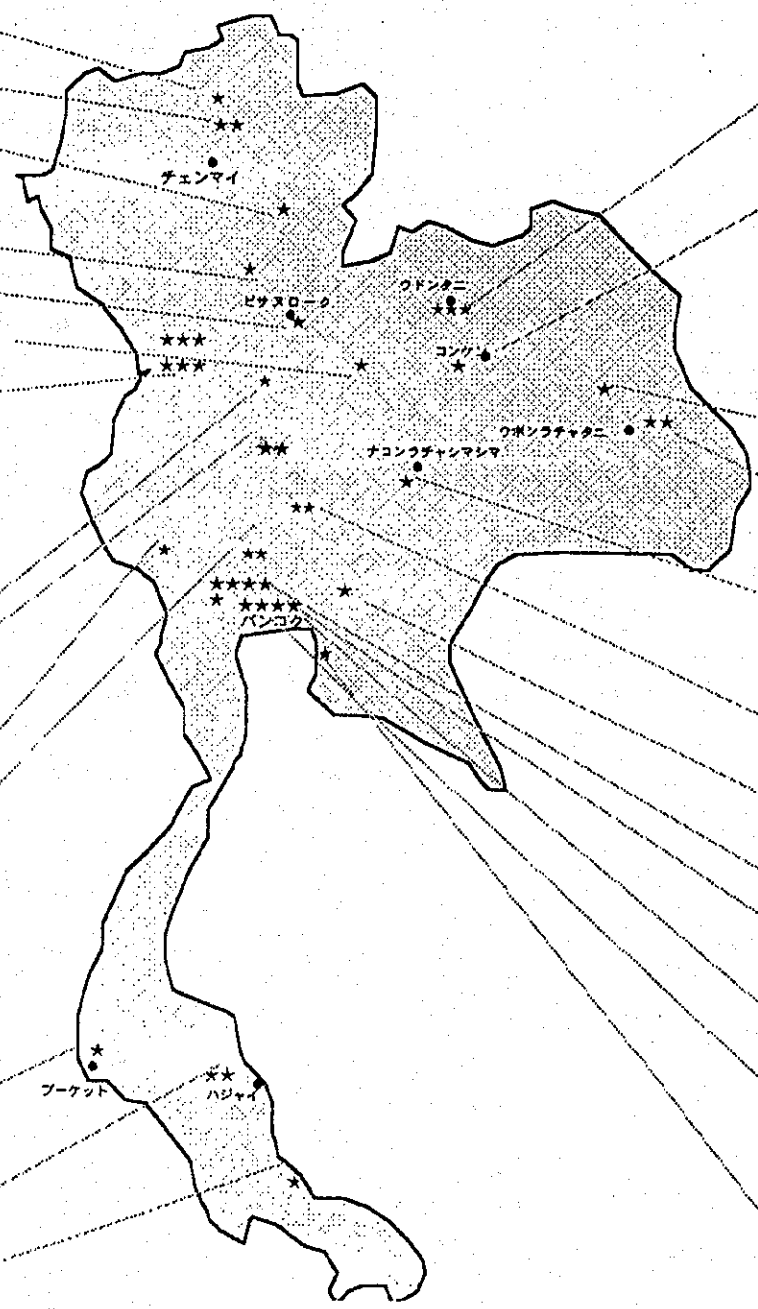
1999年2月

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局
事務局長　望月　久

タイ国ＪＯＣＶ配置図

平成１０年１１月１日現在　派遣中隊員４３名(男２１名、女２２名) うちシニア１名

調査団派遣時　　派遣実績　321名



CHIANG RAI (チェンライ)
長谷川　浩　(９／２,果樹,ﾁｪﾝﾗｲ山岳民族福祉開発ｾﾝﾀｰ,99/12/7)

PAYAO (パヤオ)
茨木　英一　(10／1,電子計算機,パヤオ工業高等専門学校,2000/7/13)
鍋島　由紀子　(10／1,家政,ﾊﾟﾔｵ県山岳民族福祉ｾﾝﾀｰ,2000/7/13)

LAMPANG (ランパン)
森川　道子　(９／２,村落開発,ﾗﾝﾊﾟﾝ山岳民族福祉開発ｾﾝﾀｰ,99/12/7)

SUKHOTHAI(スコタイ)
高橋　昭博　(９／３,農業共同組合,土地改革局スコタイ農地改革ｾﾝﾀｰ 2000/4/6)

PHISANULOK(ピサヌローク)
小林　潔子　(10／1,村落開発,第６地域社会開発支援ｾﾝﾀｰ,2000/7/13)

PHETCHABUN (ペチャブン)
土屋　道樹　(10／1,ｼｽﾃﾑｴﾝｼﾞﾆｱ,ﾍﾟﾁｬﾌﾞﾝ工業高等専門学校,2000/7/13)

TAK (ターク)：山岳民族自立支援のためのチーム協力
上原　亮　(シニア,村落開発,ﾀｰｸ山岳民族福祉開発ｾﾝﾀｰ,99/6/4)
長田　一彦　(８／２,測量,ﾀｰｸ山岳民族福祉開発ｾﾝﾀｰ,99/2/10)
中村　夕貴　(９／２,村落開発,ﾀｰｸ山岳民族福祉開発ｾﾝﾀｰ,99/12/7)
西川　享子　(９／３,保健婦,ﾀｰｸ山岳民族福祉開発ｾﾝﾀｰ,2000/4/6)
安藤　孝政　(10／1,家畜飼育,ﾀｰｸ山岳民族福祉開発ｾﾝﾀｰ,2000/7/13)
福嶋　真一　(10／1,野菜,ﾀｰｸ山岳民族福祉開発ｾﾝﾀｰ,2000/7/13)

KAMPHAENG PHET(カムペンペット)
藤井　豊子　(８／２,電子計算機,ﾗﾀﾁｬﾊﾞｯﾄ大学ｶﾑﾍﾟﾝﾍﾟｯﾄ校,98/12/10)

NAKHON SAWAN (ナコンサワン)
古舘　亨　(８／２,食品加工,ﾗﾀﾁｬﾊﾞｯﾄ大学ﾅｺﾝｻﾜﾝ校,99/12/10)
太田　弘　(８／３,電子計算機,ﾗﾀﾁｬﾊﾞｯﾄ大学ﾅｺﾝｻﾜﾝ校,99/4/6)

KANCHANA BURI (カンチャナブリ)
○ 鈴　千佳見　(10／1 日本語教師,ﾗﾀﾁｬﾊﾞｯﾄ大学ｶﾝﾁｬﾅﾌﾞﾘ校,2000/7/13)

AYUTTHAYA (アユタヤ)
○ 神田　陽子　(８／３,日本語教師,ﾗﾀﾁｬﾊﾞｯﾄ大学ｱﾕﾀﾔ校,99/4/6)
○ 石川　薫　(９／１,日本語教師,ﾗﾀﾁｬﾊﾞｯﾄ大学ｱﾕﾀﾔ校,99/7/8)

PHUKET (プーケット)
○ 田中　いち　(８／１,日本語教師,ﾗﾀﾁｬﾊﾞｯﾄ大学ﾌﾟｰｹｯﾄ校,99/7/8)

SONGKHLA (ソンクラー)
○ 田嶋　美江子　(８／２,日本語教師,ﾗﾀﾁｬﾊﾞｯﾄ大学ｿﾝｸﾗｰ校,98/12/10)
池野　雅弘　(８／３,電子計算機,ｿﾝｸﾗｰ大学ﾊｼﾞｬｲ校,99/4/6)

PATTANI (パタニ)
大橋　義典　(８／３,自動車整備,ﾊﾟﾀﾆ職業学校,99/4/6)

UDON THANI (ウドンタニ)
長島　博夫　(８／２,食用作物,ｳﾄﾞﾝ育苗ｾﾝﾀｰ,99/12/10)
藤井　佳之　(８／３,電子計算機,ﾗﾀﾁｬﾊﾞｯﾄ大学ｳﾄﾞﾝﾀﾆ校,99/4/6)
百生　詩絵子　(９／２,村落開発,ｳﾄﾞﾝﾀﾆ農業普及事務所,99/12/7)

KHONKAEN(コンケン)
山城　昭夫　(８／３,自動車整備,ﾗﾀﾁｬﾓﾝｺﾝ工科大学ｺﾝｹﾝ校, 99/4/6)

YASOTORN (ヤソトン)
小池　陽子　(８／２,植林,ﾔｿﾄﾝ苗畑ｾﾝﾀｰ,99/3/31)

UBON RACHATHANI (ウボンラチャタニ)
多田　昌豊　(８／３,食品加工,ｳﾎﾞﾝﾗﾁｬﾀﾆ大学, 99/4/6)
○ 平岩　ゆか　(９／３,日本語教師,ｳﾎﾞﾝﾗﾁｬﾀﾆ大学,2000/4/6)

NAKHON RATCHASIMA (ナコンラチャシマ)
藤原　英之　(８／２,電子機器,ﾗﾀﾁｬﾓﾝｺﾝ工科大学ﾅｺﾝﾗﾁｬｼﾏ校,99/5/31)

LOP BURI (ロブリ)
上野　興森　(10／1,興隆,ロブリ特別教育学校,2000/7/13)
○ 国田　智子　(10／1,日本語教師,ﾗﾀﾁｬﾊﾞｯﾄ大学ﾛｰﾌﾞﾌﾞﾘ校,2000/7/13)

CHACHOENSAO (チャチュンサオ)
○ 清田　薫　(10／1,日本語教師,ﾗﾀﾁｬﾊﾞｯﾄ大学ﾁｬﾁｭﾝｻｵ校,2000/7/13)

PATHUMTHANI (パトンタニ)
柳谷　和人　(８／２,野球,ｱﾏﾁｭｱ野球連盟,98/12/10)

NONTHABURI (ノンタブリ)
木村　和代　(10／1,興隆,バケッド障害乳幼児ﾎｰﾑ,2000/7/13)
佐藤　紀子　(10／1,青少年活動,バケッド身体障害児ﾎｰﾑ,2000/7/13)

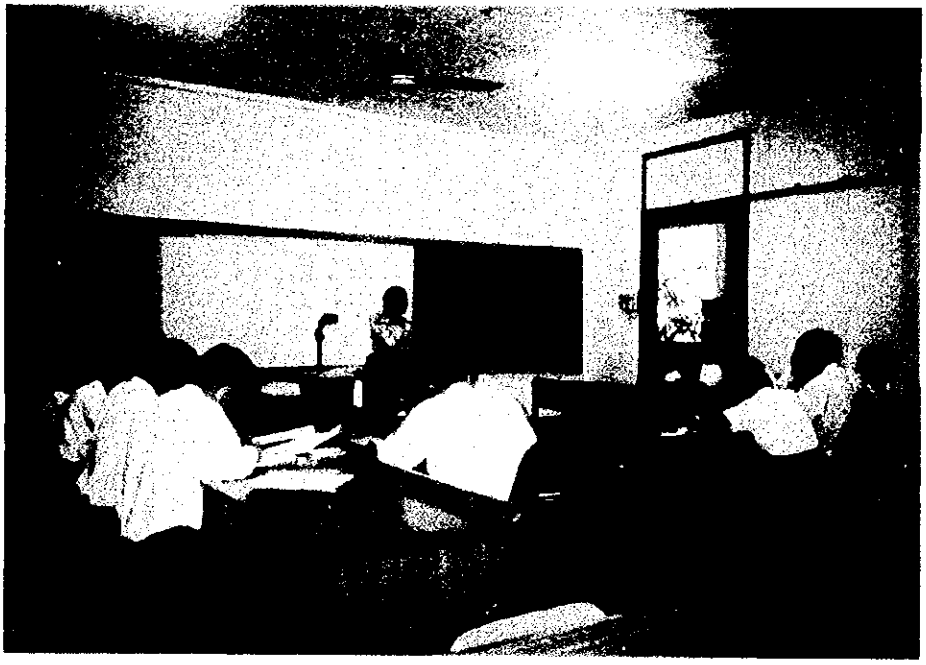
SAMUT PRAKAN (ｻﾑｯﾄﾌﾟﾗｶｰﾝ)
宮原　巽　(10／1,理学療法士,ﾊﾟﾊﾟﾃﾞｰﾝ身体障害者成人ﾎｰﾑ, 2000/7/13)

BANGKOK (バンコク)
土屋　良一　(８／１,組織培養,組織培養ｾﾝﾀｰ,99/1/8)
阿知　陽子　(８／２,理学療法士,タイ障害児財団,99/3/10)
○ 沼田　雄美　(９／１,日本語教師,ﾓﾝｸｯﾄ王工科大学ﾗﾑﾊﾟﾝ校,99/7/8)
矢ヶ崎百合子　(10／1,興隆,ｾｰﾗﾁﾌﾟﾝ聾学校,2000/7/13)

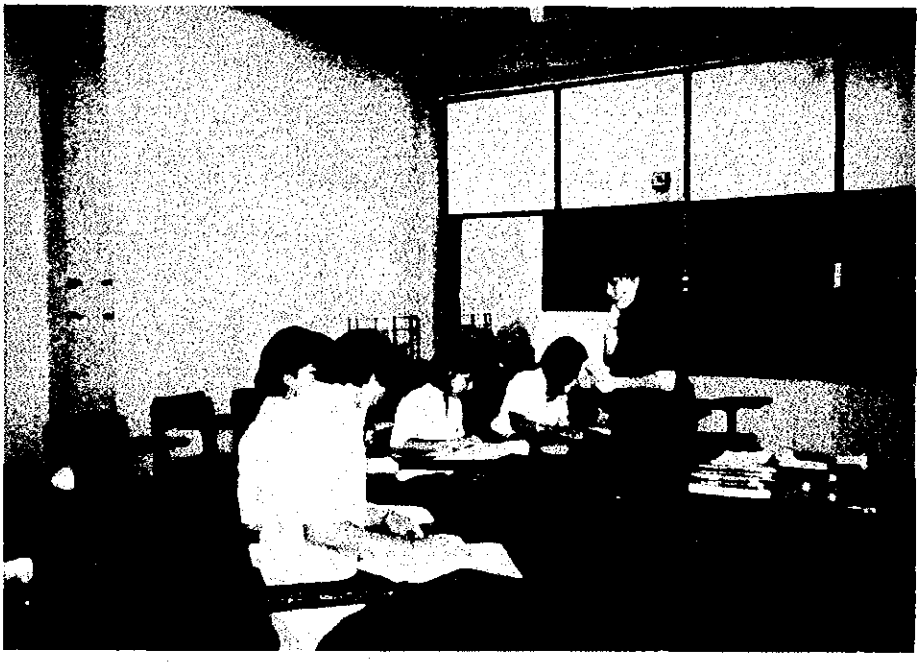
CHON BURI (チョンブリ)
○ 藤田　裕子　(９／１,日本語教師,ﾌﾞﾗﾊﾟｰ大学,99/7/8)

JICAタイ事務所表敬訪問

ラチャパット大学本局(ORIC)表敬訪問

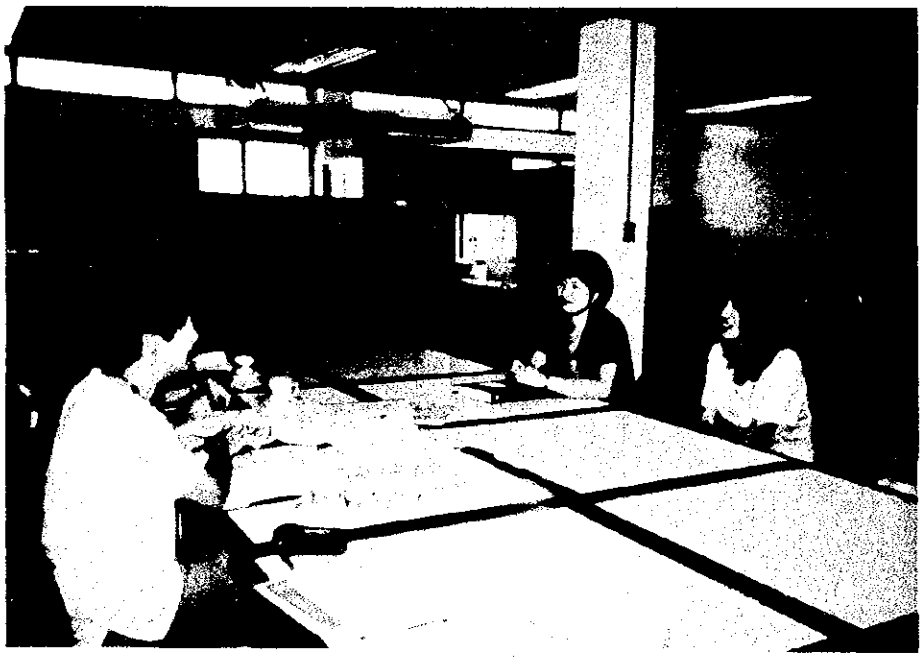


園田　智子隊員（ラチャパット大学テープサトリ校）授業風景
（聞き取りの練習）



得田　陽子隊員（ラチャパット大学アユタヤ校）授業風景
（年賀状の書き方について指導）

藤田隊員配属先(ブラパー大学)訪問
(左から片岡CC、藤田隊員、ナルモン東洋言語学科長、内田団長)



沼田隊員配属先(モンクット王工科大学)訪問
(左から内田団長、沼田隊員、大橋隊員OG)

田幡　美江子隊員配属先（ラチャパット大学ソンクラー校）にて
（学生が作った絵カード。絵に描かれた物の名前の頭文字とひらがな標記を組み合わせている。ひらがなの暗記を少しでも楽しいものにしようという隊員の工夫が見られる。）

平岩　ゆか隊員授業風景
（ウボンラチャタニ大学・カードを使ったひらがなの練習）

森　千枝見隊員（ラチャパット大学カンチャナブリ校）授業風景
（OHP機材を活用している。）

清田　薫隊員配属先（ラチャパット大学チャチュンサオ校）訪問
（左から片岡CC、内田団長、マリー先生、ヌチャナ先生、
清田隊員、森川先生）

日本語教師隊員との協議・勉強会

プリンスオブソンクラー大学パタニ校
（兼丸先生の授業を見学させていただいた。会話の練習の様子）

目　次

序文
隊員配置図
写真

1　巡回指導調査団の派遣

1－1　調査団派遣の背景及び目的 …… 1
1－2　調査項目 …… 2
1－3　団員構成 …… 2
1－4　調査日程 …… 2
1－5　主要面談者 …… 2

2　調査結果概要

2－1　タイ国における日本語教育概況 …… 2
2－2　タイ国関係政府機関の意向（総理府技術経済協力局：DTEC） …… 3
（ラチャパット大学本局：ORIC） ……
2－3　ラチャパット大学における日本語教育の現状 …… 3
2－4　隊員配属先からの聞き取り結果 …… 3
2－5　国際交流基金の協力現況及び今後の方針 …… 3
2－6　隊員が抱える問題及び現在の取り組み …… 3
これまでの報告書及び調査結果から ……
日本語教師隊員全員との協議・勉強会から ……
2－7　シニア海外ボランティアの今後の派遣 …… 3

3　隊員の活動状況及び技術指導

3－1　総合大学
ブラパー大学 …… 4
モンクット王工科大学ラカバン校 ……
ウボンラチャタニ大学 ……
シラパコン大学ナコンパトム校 ……
3－2　ラチャパット大学各校
テープサトリ校 …… 5
アユタヤ校 ……
ソンクラー校 ……
カンチャナブリ校 ……
チャチュンサオ校 ……
3－3　隊員配属先以外の日本語教育の現場訪問
プリンスオブソンクラー大学パタニ校 …… 5
ベンチャママハーラート中等学校 ……
3－4　個別面談（ラチャパット大学プーケット校） …… 5

4　今後の日本語教師隊員派遣にあたって

4－1　派遣規模・派遣先 ……7
4－2　ラチャパット大学へのシニア隊員の派遣 ……7

5　添付資料

・タイ国日本語教師隊員派遣年表
・国際交流基金からの収集資料
　「タイの日本語教育概況」等各種統計資料
・ラチャパット大学における日本語カリキュラム改訂の動き（星井、石川隊員作成）
・タイ人学習者の学習スタイル（藤田隊員作成）
・隊員配属先の日本語教育実施状況（要請背景調査表添付資料）

1　巡回指導調査団の派遣

1－1　調査団派遣の背景・目的

タイ国への日本語教師隊員の派遣は１９８１年に始まり、今年で１８年目を迎える。これまでに７３名の隊員が派遣されたが、これはタイ国への全派遣隊員数の約２０％を占めている。派遣機関数は２８機関に及び、その内訳は総合大学１１、ラチャパット大学（旧教員養成大学）１０、高等学校５、技術・職業教育校２となっている。派遣当初から、派遣先は大学における日本語教育体制整備支援が中心であった。一時期、高等学校への隊員派遣を行ってきたが、国際交流基金が「青年日本語教師（TAP)」を高等学校に派遣することを決定したことにより、高等学校への隊員派遣は打ち切った経緯がある。

平成１０年１２月１日現在、９機関の配属先へ１０名の隊員が派遣されている。これはタイ国へ派遣中の全隊員数の２３％を占め、依然タイ国への協力隊派遣の中心分野となっている。派遣機関の内訳は総合大学３、ラチャパット大学６であり、主に総合大学における主専攻コースの整備、及びラチャパット大学における副専攻コースの拡充のため、活動を行っている。

これまでの活動については、タイ人日本語教師の定着率の低さや不在の問題等に苦しみながらも、地道な活動を続けたことにより、配属先から一定の評価を得ており、今後とも継続的な派遣が望まれている。特に近年においては、国際交流基金の専門家派遣数が予算削減により９名から５名へと減りつつあり、協力隊への配属先からの期待は一層高まりつつある。

しかし一方で、隊員派遣を１代のみで打ち切った配属先も少なくなく、これまでに１１機関にものぼる。その理由として、現地教師との人間関係におけるトラブルや、配属先の教育体制の脆弱さ等があげられるが、他国と比較し派遣の歴史も長く、派遣人数も多いにも関わらず、派遣の一貫性、継続性があるとは言い難い状況にある。このような現状を打開するため、今後の隊員派遣について、明確な戦略を策定する必要が生じている。

また、現地事務所からは、今後の隊員活動を効果的に行うための支援要員として、シニア隊員の派遣を要請してきており、その必要性について検討する必要がある。現在、隊員の派遣はラチャパット大学の副専攻課程への支援が中心となっているが、同じ副専攻課程でも各校で、目標設定やカリキュラム、教材等にばらつきがあり、連携の必要性が生じている。これまで、隊員が中心となって、「ラチャパット副専攻コース担当者連絡会」が開催され、連携の動きを見せつつはあるが、一般隊員は個々の活動が優先されるため、なかなか定着が見られない。このような状況下、ラチャパット大学各校との連携・本局との調整役としてシニア隊員派遣が期待されている。

さらに、現在派遣中の隊員活動について、技術的なアドバイスが求められている。現在隊員は「日本語教師の会」という勉強会を作り、隊員間の連携を深めながら、技術力の向上に努めているが、隊員間の情報交換のみでは限界があり、より専門的見地からの助言が必要となっている。

このような経緯から、以下の目的のためタイ国日本語教師隊員巡回指導調査団が派遣された。

（1） タイ国日本語教育分野における協力隊員の今後の派遣の方向性について、関係諸機関との協議を含め、調査を行う。
（2） 今後の隊員活動の支援要員として、シニア隊員派遣の必要性を検討する。
（3） 活動中隊員に対し、技術的指導を行う。

1－2　調査項目

（1） 今後の協力隊派遣についてタイ国受入窓口機関、配属先の意向。
（2） 国際交流基金専門家、及びシニア海外ボランティアの派遣方針。
（3） 上記制度との派遣体制の調整の必要性。
（4） シニア隊員派遣についてラチャパット大学本局及び各校の意向及び受入体制。
（5） ラチャパット大学各校間の連携について各隊員の問題意識。
（6） シニア隊員派遣について、活動中隊員の意見聴取。
（7） 派遣中隊員の活動実施上の問題点に対する助言・指導。

1－3　団員構成

（1） 団長・日本語教育
内田　ナナ（国際協力事業団　青年海外協力隊事務局　技術専門委員）

（2） 業務調整
望月　恵美（国際協力事業団　青年海外協力隊事務局　派遣第一課　タイ国担当）

1－4　調査日程

月　日	曜日	調査　行程	宿泊先	同行者
11月15日	日	10：30　成田発（TG641） 15：30　ﾊﾞﾝｺｸ着	ﾊﾞﾝｺｸ	
16日	月	8：30　事務所との協議 10：00　日本大使館表敬 14：00　技術経済協力局（DTEC）表敬 15：00　ﾗﾁｬﾊﾟｯﾄ大学本局（ORIC）表敬	ﾊﾞﾝｺｸ	片岡調整員
17日	火	7：00　ﾎﾃﾙ発→ﾛﾌﾞﾘへ 10：00　ﾗﾁｬﾊﾟｯﾄ大学ﾃｰﾌﾟｻﾄﾘ校視察 12：00　ｱﾕﾀﾔへ移動 15：00　ﾗﾁｬﾊﾟｯﾄ大学ｱﾕﾀﾔ校視察	ﾊﾞﾝｺｸ	ORIC職員 （Ms. Ubon、 Ms. Nanthiya） 片岡調整員
18日	水	7：00　ﾎﾃﾙ発→ﾁｮﾝﾌﾞﾘへ 10：00　ﾌﾞﾗﾊﾟｰ大学視察 12：00　ﾊﾞﾝｺｸへ移動 15：00　ﾓﾝｸｯﾄ王工科大学視察 18：05　→ﾊｼﾞｬｲへ（TG408） 19：35　ﾊｼﾞｬｲ着	ﾊｼﾞｬｲ	上田SV調整員 片岡調整員
19日	木	7：30　ﾎﾃﾙ発→ﾊﾟﾀﾆへ 9：30　ﾌﾟﾘﾝｽｵﾌﾞｿﾝｸﾗｰ大学ﾊﾟﾀﾆ校視察 11：30　→ｿﾝｸﾗｰへ 14：00　ﾗﾁｬﾊﾟｯﾄ大学ｿﾝｸﾗｰ校視察 18：05　→ﾊﾞﾝｺｸへ（TG236） 19：35　ﾊﾞﾝｺｸ着	ﾊﾞﾝｺｸ	日本大使館小暮書記官 片岡調整員
20日	金	7：00　ﾎﾃﾙ発→ｶﾝﾁｬﾅﾌﾞﾘへ 10：00　ﾗﾁｬﾊﾟｯﾄ大学ｶﾝﾁｬﾅﾌﾞﾘ校視察 13：00　→ﾅｺﾝﾊﾟﾄﾑへ 15：00　ｼﾗﾊﾟｺﾝ大学ﾅｺﾝﾊﾟﾄﾑ校視察 16：00　→ﾊﾞﾝｺｸへ	ﾊﾞﾝｺｸ	奥井調整員
21日	土	終日　日本語教師隊員との協議・勉強会	ﾊﾞﾝｺｸ	
22日	日	資料整理 17：50　→ｳﾎﾞﾝﾗﾁｬﾀﾆへ（TG030） 18：55　ｳﾎﾞﾝﾗﾁｬﾀﾆ着	ｳﾎﾞﾝﾗﾁｬﾀﾆ	落合調整員
23日	月	9：00　ｳﾎﾞﾝﾗﾁｬﾀﾆ大学視察 19：40　→ﾊﾞﾝｺｸへ（TG031） 20：45　ﾊﾞﾝｺｸ着	ﾊﾞﾝｺｸ	落合調整員
24日	火	8：00　ﾎﾃﾙ発→ﾁｬﾁｭﾝｻｵへ 9：30　ﾗﾁｬﾊﾟｯﾄ大学ﾁｬﾁｭﾝｻｵ校視察 14：00　国際交流基金表敬・懇談 15：30　事務所との協議報告	ﾊﾞﾝｺｸ	ORIC職員 （Ms. Ubon、 Ms. Nanthiya） 片岡調整員
25日	水	11：20　ﾊﾞﾝｺｸ発（TG640） 19：00　成田着		

1－5　主要面談者

タイ側

・総理府技術経済協力局（DTEC）

Mr. Nipon Sirivat（海外第一協力部・ボランティア課課長）
Mrs. Prepassorn Thanusingha（同上担当職員）

・ﾗﾁｬﾊﾟｯﾄ大学本局（ORIC）

Dr. Thongkoon Hongpan（局長）
Dr. Suwan Nakpanom（局次長）
Mr. Panich Buasam-ang（計画部渉外担当）
Ms. Ubon Phupokai（計画部渉外担当）
Ms. Nanthiya Nonthanum（計画部渉外担当）

・ﾗﾁｬﾊﾟｯﾄ大学ﾃｰﾌﾞｻﾄﾘ校

Ms. Chutina Tanuthamatat（日本語科教師）

・ﾗﾁｬﾊﾟｯﾄ大学ｱﾕﾀﾔ校

Mr. Saman Wirakamhang（人文社会学部　副学部長）
Mr. Kanchai Jamroekjat（人文社会学部　外国語学科長）
Mrs. Hatairat Thabvasu（日本語科主任）
Mr. Supharoek Kaewsri・Ngam（日本語科教師）

・ﾗﾁｬﾊﾟｯﾄ大学ｿﾝｸﾗｰ校

Mr. Niwast Klinggam（学長）
Mr. Wanee Thammmachote（副学長）
Ms. Somsawas Joroenrit（副学長）
Mrs. Euanjit Samma（人文学部長）
Mrs. Ladawan Jantarak（外国語学科長）
Ms. Phiengjai Phlphorke（日本語科教師）
Mrs. Jirawan Naksithong（日本語科教師）

・ﾗﾁｬﾊﾟｯﾄ大学ｶﾝﾁｬﾅﾌﾞﾘ校

Mr. Sanit Choondee（学長）
Ms. Wancharee Choochart（副学長、教務担当：元英語教師）
Mr. K. Monthorn（人文社会学部長）
Ms. Patarasupa Siangyai（日本語科教師）

・ﾗﾁｬﾊﾟｯﾄ大学ﾁｬﾁｭﾝｻｵ校

Mr. Thepnakhorn Thakttong（外国語学科長）
Ms. Nutcanun Chunjunatud（副学科長・日本語科教師）

Ms. Malee Pongpanieh（日本語科教師）
森川　実紀（日本語科契約教師）

・ﾌﾞﾗﾊﾟｰ大学

Ms. Narumol Leepiyachart（東洋言語学科助教授）
Ms. Nanchaya Mahakhan（東洋言語学科教師）
Ms. Pansek Arthornturasook（東洋言語学科教師）
岸本　美紀（東洋言語学科契約教師）
大橋　誠（東洋言語学科契約教師）

・ﾓﾝｸｯﾄ王工科大学ﾗｶﾊﾞﾝ校

Ms. Yanlekha Wongsahai（日本語科教師）
Ms. Suradda Teentamnu（日本語科教師）
Ms. Tassaneeya Saelee（日本語科教師）
大橋　孝子（（日本語科契約教師、隊員OG）

・ｼﾗﾊﾟｺﾝ大学ﾅｺﾝﾊﾟﾄﾑ校

Ms. Susiri Pornswatdipak（日本語学科長）
Mr. Wabchai Silapattagul（日本語学科教師）
Ms. Chadaporn Chanprasert（日本語学科教師）

・ｳﾎﾞﾝﾗﾁｬﾀﾆ大学

Ms. Preeyaporn Jaroenbutra（英語教師、日本語講座担当）

・ﾌﾟﾘﾝｽｵﾌﾞｿﾝｸﾗｰ大学ﾊﾟﾀﾆ校

Ms. Rawewan Chaumpluk（人文社会学部長）
Mr. Chailaert Kitprasert（副学部長）
Mr. Warawit Baru（東洋語学科長）
Mr.Ekachai Saetung（日本語科長）
Ms. Nuanpan Seenprachawong（日本語科教師）
Ms. Nisakorn Thongnork（日本語科教師）
Ms. Dutsadee Toton（日本語科教師）
兼丸　薫（日本語科教師）
北川　利彦（日本語科教師）

・ﾍﾞﾝﾁｬﾏﾏﾊｰﾗｰﾄ中等学校

花井　慎行（青年日本語教師）

日本側

・在タイ日本大使館

小暮　康二（一等書記官）

・国際交流基金ﾊﾞﾝｺｸ日本語センター

小松　諄悦（所長）
宮田　浩司（主管）
三原　龍志（主任講師）

・JICAタイ事務所

岩口　健二（事務所長）
梅崎　裕（担当次長）
上田　義晴（シニア海外ボランティア調整員）
奥井　利幸（協力隊調整員）
片岡　真奈美（協力隊調整員）
落合　弘（協力隊調整員）

2　調査結果概要

2－1　タイ国における日本語教育概況

タイにおける日本語教育は１９６０年代以降、高等教育機関を中心に発展してきたが、近年は中等学校での伸びも著しく、実施機関数は依然増加の傾向にある。現在日本語教育を行っている中等教育機関は約７０、高等教育機関は約９０、その他民間にて約２０機関が日本語教育を実施している。地理的にはバンコクを含めた中央部に実施機関が集中しており、今後ラチャパット大学や総合大学を拠点として地方の日本語教育機関を牽引していくことが望まれている。

一方、日本語教師はタイ人、邦人併せて５００人程が存在するが、そのうち４０％は邦人教師であり、彼らの果たす役割は大きい。特に地方の教育機関においては、バンコクを含めた中央部に実施機関が集中しているため、日本語教師も中央に流れがちとなり、継続的なタイ人教師の確保が困難な状況にある。このため、邦人教師が中心となって日本語教育を行っている機関は少なくなく、今後地方の日本語教育の発展へ向け、タイ人教師の確保、育成が不可欠である。

2－2　タイ国受入窓口機関の意向

（1）総理府技術経済協力局（DTEC）

日本語教師隊員の派遣に対しては、JICA事務所と協議した派遣割合（全体の２０％）のとおり実施することで異存なしとのコメントがあった。また、シニア派遣について、ラチャパット本局等関係機関との協議結果について報告依頼があった他は特にコメントはなかった。

上記のとおり現在のDTEC の姿勢は非常に受け身であるが、過去の隊員報告書において「DTECは大学に何代も隊員を送り続けることには消極的であるが、地方での日本語教育の発展には継続的な協力が必要であり、DTECに対する協力隊からの働きかけが重要かつ不可欠である。」との指摘もあり、今後の派遣方針について積極的に協議を行いながら、共通理解を深めることが重要と思われる。

（2）ラチャパット大学本局（ORIC）

ラチャパット大学は教育省管轄下にあり、前身は教員養成校である。地域に根ざした高等教育機関として地域総合大学化を目指し、９２年に現在の名前に改称された。ﾊﾞﾝｺｸにある本局（ORIC）と地方を中心とした３６校の大学から成る。

協力隊員の派遣は８７年から始まり、これまで地方各校に日本語教師の他、電子機器、電子計算機、システムエンジニア等多くの隊員が派遣されてきた。長年にわたる隊員の派遣実績から隊員に対する理解と評価は高く、今後とも継続的な派遣を要請された。

また、ORICへのシニア隊員の派遣を強く望む声があった。現在ORICでは、今後の日本語教育をどう進めカリキュラム・コース改善、教材整備等をどう行えば良いか、そのために各校とどう連携を図っていくか、模索している状況にある。これらの課題の解決へ向け、シニアへの期待は大きいといえよう。特に、各校間の連携を図りながら上記課題の解決を図るため、シニアには本局及び各校との連携・調整役となることが求められる。

なお、シニア隊員活動に際しては、各種連絡会議の運営等を共同で行う実務的なカウンターパートの必要性を確認したところ、本局及び各校へ１名ずつカウンターパートを配置したいとの申し出があった。また、出張旅費等必要経費の支出も前向きに検討したいとのことである。

２－３　ラチャパット大学における日本語教育の現状

現在、全３６校のラチャパット大学のうち、日本語教育を何らかの形で実施している大学は２８校。その多くは選択科目としての日本語コースであり、９８年１１月現在、副専攻課程開設校は７校、主専攻課程開設校は１校のみであるが、その数は今後増加することが予想される。

日本語教育実施の基本的なシステムとして、主・副専攻に必要な単位数、取得科目名、科目内容等基本的な枠組みは、ラチャパット大学本局が決定し、各校へ指示することとなっている。本局から指示された後、各校は基本的な枠組みを守りながらカリキュラムを組み、本局へ申請し承認を受ける。

カリキュラムの編成について各校が情報交換を行うことはなく、互いがどのような教材を使用しているかについても情報は共有されていない。最近、主・副専攻課程カリキュラムの改善を図るため、各校担当者が集まり連絡会議が開催されたが、主・副専攻の相互のつながりを認識していなかったため、科目内容にずれが生じるケースがあった。

このように各校間での連携は取られず、行われている日本語教育の内容、レベルがあ統一されていないため、同じラチャパット大学の学生であるにも関わらず出身校によって、日本語教育のレベルが大きく異なるという状況である。

２－４　隊員配属先からの聞き取り結果

本調査団では、ラチャパット大学各校、ブラパー大学において、カウンターパート、配属先の長から隊員活動の評価を聴取した。各配属先における隊員への評価は高く、協力隊の継続的な派遣を望む声が高かった。その理由として、「最新教材等、日本語教育について情報入手が早い。」「タイ人教師との人間関係を良好に保てる」「民間から派遣される講師と比較し、生活が安定しているので、仕事に集中できる。」等が挙げられた。

また、ラチャパット大学各校においては、現在の各校間の連携の現状、及びシニア隊員派遣計画についてコメントを求めた。結果、現状に対する問題意識は必ずしも高いとは言えず、連携の必要性も認識に至っていなかった。全体的に日本語教育の実施に対し、協力隊員へ依存する受け身な姿勢が見られた。

２－５　国際交流基金の協力現況及び今後の派遣方針等

国際交流基金はタイの日本語教育の振興のため、様々な支援を行っている。１９９１年にはバンコク日本語センターが開設され、本センターを中心に、各種研修事業、一般公開日本語講座の運営、教材製作事業、情報交流事業等を積極的に行っており、タイの日本語教育振興において、中心的な役割を果たしている。

しかし、近年の予算削減により、９８年から専門家派遣数は９名から５名に縮小された。現在は地方の大学へ２名、バンコク日本語センターへ３名の計５名の専門家、及び青年日本語教師４名（中等教育）が活動中である。専門家派遣数縮小に際しては、既に主専攻課程が軌道にのり、今後の協力はマンパワー的なものに過ぎないとみなされる配属先への協力は打ち切っている。また、首都圏の主要大学は数の上でも質的にも日本語教師に恵まれているが、地方においては優秀な日本語教師の確保は難しく、中核となる教師の育成、コースの充実には専門家派遣の継続が必要と判断した。

今後は、バンコク日本語センターを拠点に、日本語教師研修の開催（タイ人、邦人）、社会人を対象とした日本語講座、日本語教師へのコンサルティングに重点を置きながら、量的な拡大よりも質的な向上を目指し、的を絞った支援を展開しようとしている。また、日本語教育の多様化、個別化に対応するためには、地域に根ざした教育の在り方を探っていく必要があり、地歩の教師会の活動支援や地方巡回指導を積極的に行いながら、広域かつ横断的な協力を進める方針である。

協力隊とは、これまでも地方における日本語教師会支援、各種情報交換等様々な場面で連携が行われてきたが、今後とも現在の関係を続けていきたいとのコメントがあった。特に地方展開について、協力隊と連携して取り組もうという意向があり、今後共事務所と引き続き協議したいとの申し出があった。

２－６　隊員が抱える問題点及び取り組み

<u>これまでの報告書、及び調査結果から</u>

（１）他の民間機関から派遣される日本語教師との人間関係

タイでは多くの日本語教育機関において、日本人が契約教師として採用されており、隊員においても、日本人契約教師と共に日本語教育を行う場合がある。これまで、隊員と日本人契約教師の人間関係がうまくいかず、隊員が任地変更をした例がいくつかあったため、事務所の方針として、日本人契約教師（特にこれまでトラブルの多かった派遣機関からの日本語教師）が雇用されている配属先への隊員派遣は控えることとしていた。しかし、タイ人の優秀な日本語教師の確保が困難であり、かつ協力隊員の確保も公募であるがために不確実であるなか、これまで隊員が築いてきた日本語教育を継続していくためには、配属先において日本人契約教師が必要となるケースもある。今回調査時も、前任者任期終了から後任者派遣まで間が空いてしまうため、一時的に日本人契約教師を雇用し、授業の継続に支障を来すのを避けたいとの要望が配属先からあがっているとの報告が隊員からあった。

上記のとおり、隊員派遣と他の民間派遣機関からの日本語教師派遣との調整は複雑な問題をはらんでおり、隊員配属先を検討するにあたり、日本人契約教師が既に活動していることは、これまでの経験から否定的な要因にならざるを得ないが、今後とも隊員の意見も十分に反映させながら、ケースによって慎重かつ柔軟に対応する姿勢が望まれる。また、事務所からは、教師同士の人間関係を調整するには、配属先の姿勢も重要であり、配属先に、JOCVと他機関との役割の違いを認識し、問題が生じた場合その解決へ向けて主体的に取り組むことができるマネジメント能力があるかどうか見極めたいとのコメントがあった。

（2）タイ人教師との関係、仕事の分担方法

現在隊員が派遣されている配属先には全て、カウンターパートとしてタイ人日本語教師が配置され、日本語コースの運営は両者が一緒に行っている。カリキュラムの見直しや教科書の選定は隊員主導となっている配属先が多いこともあり、タイ人教師との関係において問題が生じているケースは今のところ少ない。しかし、一方で、今回訪問したほとんどの配属先において、タイ人がタイ語で導入・文法の説明を行った後、日本人が応用練習、会話を行うという授業スタイルがパターン化されていたことには注意しなければならない。互いの役割分担を明確にすることによって、隊員はタイ人教師の授業の中味についてほとんど口を出すことはないのである。中には、互いの授業を見学したこともないというところもあった。

「自分の日本語教師としての教育技術ーーー文型、文法を日本語だけでどうやって理解させ定着させるかーーーは進歩したとは思えない。わたしはタイ人教師がタイ語で教えて、学生が理解した後に、それを使う練習をしていれば良かった。」と、ある隊員は最終報告書で自分の活動を振り返っている。その意味するところとして、日本人、タイ人の互いの役割分担を明確にすることよって、人間関係に波風の立つこともなく、ネイティブの日本語教師としての役割は果たすことができたが、一方で、このような役割分担が日本語教育の在り方として適当であったのか、疑問を投げかけているのである。現在の隊員にもこのような視点が必要とされると考える。

現在は、自分の担当する授業運営に精一杯であり、余裕がない、もしくは、タイ人教師との人間関係を良好に保とうと半ば遠慮しがちな状況が見られるが、今後の日本語コースを充実させ、タイ人教師の育成を本格的に行うには、タイ人教師のレベルアップが最も大切であり、タイ人の授業運営にまで踏み込んだ協力が必要不可欠である。そのためには、もっと隊員とタイ人教師が授業運営についても積極的な議論をし、タイ人教師の育成も視野に入れた日本語コースの発展に隊員が取り組んでいくことを期待する。

（3）要請背景調査の添付資料の作成

これまで、要請背景調査表の記述内容が漠然としていて、派遣前の隊員に的確な情報が伝わらなかったため、派遣後に隊員が苦労する例が多々あった。その解決策を日本語教師隊員分科会で協議した結果、別添のような添付資料を隊員自らが作成することが提案され、今に至っている。現在のカリキュラム、カウンターパートととのデマケ、カウンターパートの履歴等を資料にまとめ、派遣前の隊員に情報提供することは、隊員の不安が解消するだけでなく、赴任前の準備が効率的に行える意味で非常に有意義と考える。このような解決策が隊員から提案されたことを高く評価したい。（添付資料を参照のこと。）

（4）ラチャパット大学におけるカリキュラム改定の動き

９７年、当時ラチャパット大学カンチャナブリ校に派遣されていた星井隊員が、ラチャパット大 学が定めている日本語カリキュラムに問題を感じ、その改定に取り組んだ。そして、他のラチャパット大学に呼びかけ、日本語副専攻コース会議を開催し、議論を重ねて、日本語副専攻コースのカリキュラムを改定した。現在、日本語主専攻コースのカリキュラムの改定作業が進行中である。

一連の会議が開催されたことにより、ラチャパット大学の若いタイ人教師の間にも連携が生まれ、今後、この連携を活かしてさらにラチャパット大学の日本語教育を発展させることが期待される。（添付資料を参照のこと）

（5）教材開発分科会によるテキスト作成

日本語が選択科目（総時間数40時間）としてのみ開講されているラチャパット大学に派遣された隊員は、「選択科目の実態を知り、そこからその状態を向上させるために何かすることが私たちの役割」と考え、選択科目に合ったテキストを一例作成すべく、１９９７年に教材開発分科会を発足した。日本語教師隊員に参加を呼びかけたところ９名集まり、チャチュンサオ校の見上隊員が作成・使用したテキストを基盤に、それを改定していくかたちで作業を進めた。そして、１年掛かりの改定作業の後、テキスト「日本語スキスキ」を完成させた。

日本語教師隊員の連携を図り、お互いの知識を交換し合い、学び合うことも目的としていたが、タイ人の先生もタイ語による説明やタイ語のタイプ等を積極的に手伝って下さったそうである。チャチュンサオ校の選択科目でこの教科書を使用しているタイ人の先生方に話を伺ったが評判は上々で、「日本語スキスキⅡ」の作成に目下取り組んでいるという。隊員が始めた選択科目の質と意義の向上を図る活動が大きな広がりを見せているのである。（添付資料を参照のこと。）

<u>日本語教師隊員との協議・勉強会から</u>

今回の調査はタイの日本語教育分野への隊員派遣のあり方を見直し、今後の方向性を探るのが目的のひとつである。まず、現場視察で隊員活動の状況を確認したが、その他に、日本語教師隊員全員が顔を揃え、ざっくばらんに情報交換、意見交換する場を設定した。その目的は、配属先では話すことのできない隊員の声（配属先への不満、悩み等）を聞くことはもちろんのこと、今後の派遣方針、シニア隊員派遣等に対する隊員のコメントを聴取することにあった。

話の中心は、各隊員が活動において抱える問題点を打ち明け合うことに終始したが、続ける内に各々が同様の問題に悩んでいることに気付き、時には他の隊員から経験に基づくアドバイスがあったりする中で、自然と隊員間の連携の大切さを認識したようである。

今後の派遣方針については、副専攻課程を重視する現在の方針には疑問があり、選択科目のみの開設校でも様々な問題を抱えていることを指摘する声が隊員からあった。隊員を派遣するにあたって隊員に何が必要とされ、どのような環境で活動が展開できるか、要請にどう答えるべきかを検討し、派遣先を決定すべきであり、副専攻課程が隊員派遣の最優先条件とはなり得

ないことを暗に指摘していると思われる。副専攻課程が開設されるかどうかは、配属先が今後の日本語教育をどう考えているか量る上で非常に重要な情報であるが、副専攻課程ではないから即刻隊員派遣を打ち切るような紋切り型の対応ではなく、派遣先に選定にあたっては今後とも柔軟な姿勢で臨みたい。

ラチャパット大学本局へのシニア隊員派遣については、現在ラチャパット大学配属隊員６名中、３名が本年７月に派遣されたばかりであり、これらの隊員はシニア隊員派遣の必要性について、漠然と認識するにとどまった。その他、隊員からはシニア隊員派遣を強く要望する声はあがらなかった。シニアを中心に連携して活動するとなると負担が増えるのではないか、拘束されるのではないかと懸念し、シニア派遣に魅力を感じるものの、利点と欠点とのバランスをはかりかねている様子であった。

協力隊の日本語教育活動は公的な事業である以上、質が問われ、一過性のものに終わらせない組織としての取組みが欠かせない 。連携を「義務づけられる 」と受け身に捉えるのではなく、「協力活動をより効率的に継続的に推進するためには手を携えることが必要である」と積極的に解釈してもらいたい。カリキュラムの改訂やテキスト作成を通じて、せっかく芽生えた連携の気運を埋もれさすことなく、さらに強化、発展させようという意気込みがほしいと感じた。

２－７　シニア海外ボランティアの今後の派遣

タイにはシニア海外ボランティアの派遣が９７年から開始され、現在５名が活動中である。日本語教育分野への派遣は現在はないが、日本語教師派遣要請は漸増しており、今回ラチャパット大学チェンマイ校への新規派遣が決定した。しかし、この派遣にあたっては、以下に述べる同校への隊員派遣実績等を踏まえ、今後の活動状況を慎重に見守る必要がある。

チェンマイ校へはかつて隊員が派遣されていたが、他の民間機関から派遣された日本人契約教師とのトラブルが原因で、隊員は任地変更、チェンマイ校への派遣は中止となった経緯がある。現在も日本の２つの機関から４名の日本人契約教師が派遣されており、同様のトラブルが生じる可能性が十分あるため、中止後も隊員派遣の要請はあがっていたが、事務所の判断で隊員派遣要請は断った。

しかし、チェンマイ校はラチャパット大学では唯一、主専攻課程が開設されているが、その内容は決して満足のいくレベルのものではなく、そこで、現在行われている日本語教育のレベルアップを図るため、シニアボランティアとして改めて要請が挙がったものである。

シニアボランティアに期待される内容は以下のとおりである。

（１）チェンマイ校における日本語教育の主専攻としてのカリキュラム作成に対する助言。
（２）日本語教育に際しての教師用マニュアル、レッスンプラン、教材作成支援。
（３）日本語教育の方法論や技術論に関し、チェンマイ校の教師や他の日本人契約教師へのアドバイス。

日本語主専攻校へ、日本語教育に対しての知識、経験が豊かで専門性の高いシニアボラティアを派遣することは、今後の日本語教育の発展のために意義があることと思われる。しかし一方で、配属先の受け入れ体制が不十分であったため、隊員派遣を取り止めた経緯を忘れることなく、今後のシニアボランティアの活動が円滑に進むよう注意をはらう必要があろう。また、ラチャパット大学全体の連携による質的充実を目的に、本局へシニア隊員を派遣しようという計画がある現状を踏まえ、シニアボランティア、協力隊員双方の役割、活動目標等が混乱することのないようにしたい。

現在の事務所コメントは、シニアボランティアは現場教師としてではなく、あくまで教育現場での日本語教師の指導、レベルアップを主眼とし、隊員とは業務内容面ではっきり区分して対応するとのことである。各配属先での活動内容については、上記区分で双方の役割は明確となるが、ラチャパット大学全体の日本語教育の発展を図るために双方がどう協力していくか、互いの役割を明確にしながら協力体制を構築していくことが今後の課題と思われる。そのためには、まず、お互いがどのような活動を行っているか理解をする姿勢が必要となろう。事務局としても、派遣後に双方が混乱することのないよう、派遣前からこれまでの経緯を含め十分なブリーフィングを心掛けたい。

今回、シニアボランティア業務調整員の上田氏が隊員活動現場視察に一部（ブラパー大学、キングモンクット工科大学）同行した。今後のシニアボランティアの派遣先の候補として上記配属先を検討したいとのことであったが、将来協力隊員からシニアボランティアへ派遣を引き継ぐケースも出てくることが予想される。これらを見越したうえで、今後とも綿密に情報交換や派遣調整を行い、協力体制の足並みを揃えなければならないと考える。

なお、上記配属先を視察した結果、「将来はともかく、現在は協力隊員が現場に良く溶け込んで意欲的に活躍されており、当面はシニアボランティア派遣の必要性はないものと判断する。」とのコメントが上田調整員からあった。

3　隊員の活動状況及び技術指導

巡回指導の機会はなかなか得られないため、まず第一に隊員の活動現場を可能な限り多く巡回しようと日程を組み、配属先９機関の内、実に８機関の配属先を訪問した。唯一、ラチャパット大学プーケット校の田中隊員配属先には日程調整がつかず訪問できなかったのは残念であった。また、各配属先訪問時にはカウンターパートも含め授業見学及び意見交換はできたが、強行スケジュールであったためそれぞれの隊員の相談にじっくりのるための時間は十分でなかったと思われる。以下、各配属先の隊員活動状況、及び技術指導の内容について、記載する。

３－１　総合大学

ブラパー大学（９／１　藤田 裕子 隊員）

日本語が主専攻になって３年目である。教師はタイ人、日本人（内隊員１名。以下隊員含む。）それぞれ３名、総勢６名である。東洋言語学科長は日本語コースの充実に熱心に取り組んでいるが、昨今の経済情勢の悪化による影響で教師の確保が難しくなること等を懸念していた。

２代目である藤田隊員に対する学科長の評価は非常に高く、期待の大きさを感じた。他の２名の日本人教師は個人契約で１人当たり25,000バーツの給料を支払っているが、政府予算は既にカットされており、今後も雇用を継続できるか見通しが立たない情勢である。

藤田隊員は上級の作文の授業を担当しているが、この授業に同僚のタイ人教師１名が生徒として出席している。同教師は日本の大学で修士を取っているが、自身の日本語のブラシュアップのためとのことであり、日本語教育への熱心な姿勢が窺えた。初代隊員は主専攻開設に尽力し、２代目の藤田隊員は未整備であったカリキュラムの改定、教材整備に取り組んでいる。また、日本人教師間のコーディネーター的役割や、日本の大学と学術的な繋がりを持つための連絡・調整的役割も期待されている。

モンクット王工科大学ラカバン校：KMITL（９／１　沼田 絵美 隊員）

日本語が主専攻になって２年目であり、沼田隊員は協力隊派遣全体から見れば６代目の隊員であるが、主専攻になってから派遣された２代目の隊員である。現在、タイ人教師３名、日本人教師２名、総勢５名である。日本語学科長は多忙のため挨拶を交わしただけで、面談はできなかった。タイ人教師の授業を参観した後、沼田隊員、及び同隊員の前任者で今も引き続き 同校で日本語を教えている大橋隊員OG から話を聞いた。

隊員の話によれば、主専攻を準備不十分なまま開設したため、コース整備は全てこれからの状態である。言語社会学科長はもともと英語が専門で日本語コースに対しては何の具体的な意見も指示も無く、コース運営等も全て日本人教師に任せきりであり、各教師はそれぞれ自分の教師運営に追われ、全員が顔を合わせミーティングを持つ時間もないという。このような状況下、隊員はタイ人教師の授業内容の改善、タイ人教師を巻き込んだ日本語コースの運営の必要性を感じるものの、それを行う余裕がないとのことである。

今後の計画としては、日本語科開設を進め、今後もタイ人教師の中核となることが期待される教師が、９９年の春に国際交流基金の研修を終え戻ってくる予定であり、同教師を巻き込みながら、日本語コースの改善に向けて努力したいとのコメントが隊員からあった。こんな彼女の支えは大橋OGであり、隊員の良き相談役となっている様子が窺えた。

ウボンラチャタニ大学（9／3　平岩ゆか　隊員）

大学は東側でラオス、南側でカンボディアに接するタイ東北部のウボンラチャタニ県の中心都市にある。日本語は自由選択科目として開講されている。学生の受講の動機は日本語を勉強して就職に生かす等の明確なものでなく、日本語なら「A」評価が取り易いのではないか、漢字が面白そうといった半ば不純なもしくは好奇心によるものとの隊員の報告があった。選択科目のため受講する学生の人数が経れば開講されない恐れもあり、受講人数を左右する成績の出し方には苦慮しているとのことである。

平岩隊員は2代目であり、教師はタイ人教師1名、日本人教師1名の総勢2名である。タイ人教師は英語との兼任で、授業を2コマ受け持つ他は「何かあったら言ってね。手伝うから」というような受け身の姿勢である。しかも、海外留学が内定し今学期限りの勤務であり、よって、タイ人教師の確保が緊急の課題となっている。

平岩隊員の「ひらがな」指導の授業を見学した。習った日本語を使う、話すことのほとんどない学生も、文字の学習には興味を示し、熱心に読み書きの練習に励むそうである。芸術的とも言えるタイの文字を「きれいに」書くのに喜びを感じるタイの学習者の特性なのだろうか。隊員はカードを使ったゲーム等、教材作りに努め、学生も意欲的であった。ただ、最初の授業から2週間はひらがな、かたかなの学習のみといった読み書きに少々偏ったスケジュールだったので、聞いて、話す内容も組み込むよう助言した。

ウボンラチャタニ県では、隊員の他に国際交流基金青年日本語教師としてベンチャママハーラート中等学校に派遣されている日本人、及び京都教育大学堀内教授を通じて（通称「堀内プログラム」）ラチャパット大学ウボンラチャタニ校に派遣されている日本人、計2名の日本人教師がおり、彼らとも意見交換の場を持った。結果、いずれの配属先においても、タイ人日本語教師の継続的な確保の困難さや授業運営方法の改善の必要性等があることがうかがわれ、課題は隊員の配属先と共通していることがわかった。

なお、タイ東北部では97年にコンケン県でコンケン大学に配属された隊員が中心となって「イーサーン（東北部）日本語教師の会」を発足させた。その目的は、東北部日本語教師（日本人、タイ人含め）の情報交換や日本語教育の質の向上にあり、年4回の勉強会を予定していたが、隊員の帰国後は活動が停滞している。このような勉強会を定期的に行うことは、日頃の授業からは得ることのできない知識や教授法を学ぶ良い機会であり、また、各校が抱える問題点や対応等について意見交換をすることにより、他校の経験により得られた効果を地域全体で共有することができ、特に情報の少ない地方において、重要な意味を持つものと思われる。ついては、これまでの経緯を引き継ぎながら、協力隊員が中心となって復活させることにより、配属先における協力のみならず、地域全体の日本語教育への貢献が可能となる。隊員の今後の取り組みに期待すると共に、現在のように隊員1名のみの派遣では、タイのおよそ4分の1を占める東北部全てをカバーすることは地理的に困難な状況に鑑み、複数隊員の派遣を検討することが必要と思われる。

シラパコン大学ナコンパトム校（現在隊員要請中）

日本語科は83年に必修選択科目として開講され、協力隊は86年から6代にわたり隊員を派遣している。その間に91年に副専攻課程が、97年には主専攻課程が開講され、現在、1・2年は選択科目として、3・4年生は主専攻・副専攻として日本語を学んでいる。日本語

教師は、タイ人教師５名（うち１名留学中）、日本人契約教師２名、総勢７名である。タイ人教師の全てが日本の大学院において修士を取得しており、日本語教育経験も５年以上持つ者がほとんどで、このような経験豊富なタイ人教師陣に恵まれ、タイ西部地域における日本語教育の中心的な存在となっている。

９８年度春募集で交代隊員が要請されたが、候補者の辞退により隊員派遣が空白となっており、次回の募集での確保が待たれている。当初は６代で派遣を終了する予定であったが、専攻課程の整備にもうしばらく協力が必要と判断され、１代延長になった。７代目の隊員派遣により、専攻課程を早期に軌道に乗せ、ネイティブとしての日本人教師の役割を明確にし、手法、教材を整えることが配属先から望まれている。

日本語学科長は日本語教師として１６年の経験を持っており、学科長が中心になりながらタイ人教師が主体となって日本語教育を進める体制は、すでにできつつあるように思われた。よって、技術移転の観点から見れば、隊員派遣は終了できる状況にあるが、一方、日本での日本語教授経験の少ない隊員が多いなか、日本語教師としての経験を積む意味で体制が整っている本大学への継続派遣は、日本人日本語教師の育成という観点から見れば有効であろう。

３－２　ラチャパット大学各校

ラチャパット大学 テープサトリ校（１０／１　園田知子 隊員）

日本語は９３年に副専攻コースとして開講された。日本語教師は、タイ人教師２名、日本人教師１名、総勢３名である。園田隊員は初代隊員であり、配属後３ヶ月足らずであったが、タイ人教師との良好な人間関係をすでに築きつつある様子が、窺えた。ただ、互いに担当授業の運営に忙しく、会議や話し合いの時間の確保に現在苦心しているとのことである。

園田隊員は日本での教師経験、それも日本語コースを新規に立ち上げたという経験を十二分に生かし、順調なスタートを切っている。赴任すると、まず授業を見学し、情報収集に努め、活動の計画案を提示して、タイ人教師と意見交換を図るよう心掛けている。現状を的確に分析し、自身の役割を認識し、着実に実行していこうという取り組みは評価できる。

同隊員が「何にもまして全力を注ぎたい」という意気込みのもとに実施する、会話の授業を見学した。授業はほとんど日本語で進めていて、タイ語は主に意味の確認やゲーム等の説明の際に使用している。なるべく学生に考えさせると共に、恥ずかしがりやの彼らをリラックスさせようと心掛けているとのことである。

ラチャパット大学 アユタヤ校（８／３　得田陽子 隊員、９／１　石川　薫 隊員）

日本語は英語が主専攻の学生に対する副専攻として、また、観光学科の学生への選択科目として８７年から開講されている。現在は主専攻課程の開設を目指しているが、それには教師の質の向上を図る必要があり、多くの教師が国内外に留学のため在籍のまま不在となっている。このため授業の運営に支障が生じる事態に陥り、タイ人教師の確保に苦慮している。

７代にわたる派遣隊員に対する配属先の評価、信頼は高いが、現在は休職中の教師の授業をカバーするという役務業務的な活動の要素も大きい。留学中の教師が順次戻ってくれば強固な教授体制が整うと期待されるが、それまでの運営を支え、主専攻開設に向けた準備としてカリキュラムや教材の作成を行う協力が配属先から求められている。

得田隊員の授業を一部を参観したが、学生たちに慕われていることを感じさせる安定した指導であった。石川隊員は、ラチャパット大学カンチャナブリ校に派遣されていた星井隊員（７

年度３次隊）の活動を引き継ぎ、ラチャパット大学全体のカリキュラム整備、各校間の連携を目標に、共通会議の実施に努めており、今後もラチャパット大派遣隊員の中心的な役割を担いながら活躍することを期待したい。

ラチャパット大学 ソンクラー校（８／２　田幡 美江子 隊員）

日本語コースは９２年に開講され、外国語学科の中の選択科目として位置づけられている。一般学生向けと社会人向けのコースがあり、主に初級レベルである。配属先では、副専攻コースの開講を目指しており、これに向けて現在は授業数を減らし、教材作成やカリキュラム整備等の開講準備に、２代目である田幡隊員、タイ人教師共に専念している。

教師は、日本人教師１名、タイ人教師２名であるが、タイ人教師はそれぞれ英語、中国語との兼任である。教師の質・数は十分とは言えず、今後専任教師を確保するとともに現職教師のさらなるブラッシュアップも重要と考える。

現在同大学では日本語セルフアクセスコーナーという部屋を設け、日本語教材やLL設備を設置し、学生が自由に日本語の勉強をできる環境を整えている。調査団訪問時にも、数名の学生が日本語の聞き取り練習に励んでいた。

ラチャパット大学 カンチャナブリ校（１０／１　森 千枝見 隊員）

協力隊は９１年から派遣を開始し、４代目の森隊員が赴任して４ヵ月たったところである。日本語コースは９６年から副専攻となり、現在タイ人教師２名、日本人教師１名総勢３名の日本語教師で運営されている。前任者の星井隊員はカンチャナブリ校のみならずラチャパット大学全体の「日本語カリキュラム」の改訂にも取り組み、大学間の連携の構築に大きく貢献した。

そんな前任者の後を引き継いだ森隊員だが、新卒とは思えない健闘ぶりである。着任して早々、過重とも思われる授業数を持たざるを得ない状況に置かれ、本人が体力的にもよく持ったと回想するような多忙の日々であったという。しかし、大学で主専攻だった実力を十二分に発揮し、持ち前の頑張りで最初の学期をやり通した。その自信と余裕は見学した授業にもはっきりと現れ、教壇に立ってまだ半年にも満たない先生とはとても見えなかった。まず、授業計画がきちんと立てられ、アイディアあふれる教材を適材適所に使って学生を引き付け、学生のレベルに合った自然な日本語が発話できるよう指導していた。分かりやすい楽しい授業を自信を持って進めれば、学生はリラックスして授業に参加し、学習効果も上がることを実感する授業であった。

この授業を日本語副専攻の学生が教育実習生として参観していたが、授業見学の後の意見交換は双方にとって非常に勉強になっているという。それで他のタイ人の 先生にもお互いの授業を参観しあうよう呼びかけたいとのことであったが、これは実に大切なことであり是非実行するよう励ました。

ラチャパット大学 チャチュンサオ校（１０／１　清田 薫 隊員）

日本語コースは８６年に開講され、協力隊は９２年から派遣を開始し、現在は３代目の清田隊員が派遣されている。初代は任期の後半に同僚教師とトラブルが生じ、後任の派遣を見送ったので３年あまり派遣が中断した。２代目の隊員は任地変更で当校に配属となったが、１年あまりの活動中に教科書を完成させる等、非常に精力的に日本語コースの充実に取り組んだ。

教師はタイ人教師３名と隊員を含めて日本人教師２名の総勢５名である。副専攻の２年生のクラスで清田隊員とペアを組んでいるヌチャナ先生の授業を参観したが、堂々とした歯切れのよい授業展開で学生をグイグイ引っ張っているように見えた。ただし、講義調で、先生の発話のほとんどがタイ語であった。チュラロンコン大学で日本語主専攻、着任してすぐに23歳で副学科長、今後は日本の大学へ留学予定と、日本語コースの中核として大学から期待された存在である。しかし、これまで使っていた教科書を、少々強引に出身大学の先生が10年以上も前に作成したものに変更する等、他の先生を困惑させることもあるようだ。

清田隊員の説明によると、全体的に教授内容に一貫性がなく、教師間の連携ができていない為、教科書の選択さえも各自バラバラらしい。主専攻課程にしても、２０００年に開設すると大学側は言っているが何の具体的な動きもなく、今の副専攻も前述のように改善すべき点がまだまだあることから、隊員は少々不安気味であった。前任者とは１ヶ月の引き継ぎ期間があったが、その間は前任者に頼ってしまい、「何が分かっていないかが分かっていなかった」「見なければならないことを見ておかなかった」と悔やんでいた。

タイ人教師の言葉によれば、現在学長は２年間のビジネススクールの構想を練っていて、日本語コースもこれに含めることを考えているとのことである。ただし、これも情報だけが先走り、具体的な動きはない。

清田隊員は会話と作文の授業を担当し、日本語教授法の手伝いをしているが、授業準備や宿題のチェックに忙殺され、「時間が無い」「自分のことで精一杯」と精神的にも余裕が持てない様子で、このままでは疲れ果てないかと気に掛かった。真面目な姿勢は評価できるが、もう少し肩の力を抜いて、目先のことだけを見ることなく、コース全体を見渡して、他の先生の授業を参観したり、助言を求めることを薦めた。

３－３　配属先以外の日本語教育の現場訪問

プリンス・オブ・ソンクラー大学パッタニー校

今回の訪問は佐久間技術顧問より、「現在は派遣が打ち切られているが、かつて隊員が派遣されていた日本語教育機関が、その後どのような状況にあるか訪問して調査することも、見直しを図る上で大切であり、是非、日程に組み込んだ方が良い。」というアドバイスを頂き実行したものである。何校か訪ねたかったが、日程の都合があって１校に絞り、南部の地方大学であるパッタニー校を選択した。

パッタニー校では、日本語コースは８６年に選択科目として開講され、８９年に副専攻課程、９６年に主専攻課程が開設された。JOCVは９２年から２代、４年間に渡り隊員を派遣し、主専攻課程が開設した時点で引き上げている。

現在、学生は主専攻が１年生から３年生までの６３名、副専攻が２年生から４年生までの５４名である。日本人教師によれば、学生の日本に対する関心は高く、日本語コース受講希望者も多い。また、真面目によく勉強するそうである。しかし、バンコクから遠く離れた所にあるので、日本語を使う機会があまりないのが悩みとのことである。

教師はタイ人４名、日本人２名であるが、学科長以外はいずれも20代から30代前半の若手教師である。日本人教師はいずれも個人契約である。このうち男性の教師はリーダー的存在らしく、授業の一環としてバンコクの日本企業などの会社見学を企画したり、日本祭りを中心となって実施する等、アイデアをふるってコースの充実のために活躍しているように見受けられた。

学科長の説明によると目下の最大の問題点は教師の確保である。教師の質の向上をはかるた

めに大学院進学を奨励しているが、長期に不在となる教師をカバーする人材を得るのは難しい。来年度は２名が進学を予定しているため、その間は主専攻課程を休講せざるを得ないと言う。

なお、教師の養成についてはこんな話を聞いた。これまでは大学院進学や留学が決まると退職したり、中には修了しても戻らないケースが多かったので、優秀な日本語教師の養成、確保がうまくいかなかった。それで、今は念書を交わして大学側から留学を資金的に支援することを約束すると同時に、留学期間の２倍の勤務を義務づける等、大学への定着を図っているという。地方の大学の日本語教師の確保の難しさを改めて考えさせられた。

意見交換には教師全員が出席し、授業も積極的に見学させてくれること等、我々の訪問を学科をあげて歓迎している様子でった。最後に隊員の派遣を要請したいとの申し出があったが、この大学のように日本語コースの充実に真剣に取り組む姿勢が見受けられ、教師も熱心である等今後の発展が期待でき、かつ南部への隊員派遣の拠点となり得る可能性があるため、地方への隊員派遣の充実という観点からも隊員派遣を前向きに検討したい。

ペンチャママハーラート中等学校

上記高校へは国際交流基金から「海外派遣青年日本語教師」１名が派遣され、現場でタイ人教師への指導に当たっているとのことで、配属先を訪問し、青年日本語講師の話を聞くと共にタイ人教師の授業を見学した。

タイ東北部、ウボン県の中心都市ウボンラチャタニにある創立１００年を誇るこの地方の名門校である。日本語の授業は９５年に開講し、自由選択科目として週３時間履修するコースと、文系必修選択科目として週６時間履修するコースがある。必修課目の時間数は週６時間Ｘ３年間で約600時間学習することになる。現在、自由選択科目では４年生が４クラス計約80名、5年生が1クラス30名、文系必修課目では４年生が１クラス30名が勉強している。

タイ人教師２名はバンコク日本語センターの教師養成プログラムを修了し、日本で国際交流基金が行う２ヶ月の研修にも参加している。我々が見学した授業を担当していたタイ人教師は日本語専任で週18コマ担当し、自身の日本語学習及び教師としての取組みにも熱心である。しかし、もう一人の男性教師は仏教との兼任であり、多忙を理由に担当する授業は週３コマのみである。

突然の授業参観であったため、タイ人教師は緊張している様子であったが、生徒は和気あいあいとして楽しそうであった。我々が訪れた翌週に静岡県の青少年グループの訪問が予定されていて、歓迎に歌う日本の歌の練習に励んでいた。テープで覚えたという日本で最近ヒットした沖縄民謡「花」の合唱が爽やかであった。

３－４　個別面談

ラチャパット大学 ブーケット校（８／１　田中いち 隊員）

活動現場を訪問できなかった唯一の隊員である田中隊員には、バンコクで開かれた日本語教師との勉強会の後、話す機会をもった。我々が訪問した時期に、田中隊員は体調を崩して入退院を繰り返していたが、勉強会に出られるまでに快復し、顔を合わすことができて安堵した次第である。

田中隊員の話によれば、現在の悩みは、カウンターパート（Ｃ/Ｐ）の関わりとのことであった。現在同大学の日本語教師は、田中隊員とＣ/Ｐであるタイ人教師１名のみである。このＣ/Ｐは英語教師として20年の経験をもち、日本語教師としての力量もあり、日本語コース

の運営等は全て任されている。田中隊員には赴任から今に至るまでの活動状況、C/Pとのトラブルの経緯をまず詳しく話してもらった。

田中隊員は2代目であるが、前任者とは3年間の中断を挟んでいて、交替というより新規に近い派遣であった。赴任当初は基本的にC/Pとチームティーチング形式を取っていたが、C/Pは打ち合わせや教材準備等、事前の準備をしようとせず、その場まかせの授業となってしまったとのことである。このような状況が1年近く続き、限界を感じたため、「一人で授業をやらせてほしい」とC/Pに申し入れたところ、少々不満気な様子ではあったが、お互い干渉し合わないという条件で実現した。

しかし、タイ語で講義を聞くのに慣れている学生には、隊員の日本語教授スタイルはなかなか馴染まず、また、それまではアシスタント的な役割で授業に出ていたことから、教師として学生の信頼を得るのは非常に困難であった。

このような状況ではあったが授業を根気よく進めるうちに、また、同じプーケットで働く日本人の日本語教師の励ましもあり、現地のニーズにあった日本語、観光地プーケットで役に立つ日本語、学生が話せる、使えると実感する日本語を教えなければならないとの認識に至ったと言う。任期を1年延長し、テキスト作りを目指すことにしたのもそのためである。しかし、C/Pとの協力関係は築けないまま、むしろ土曜、日曜に開講した社会人コースを任される等、隊員の負担は増えていく一方となり、体調を崩してしまったのである。

入院後は調整員も含め大学側と協議し、隊員の業務量の軽減とC/Pへの協力要請を行い、当面の状況は改善された。調査団からは、しばらく体調を調えるための静養が必要とアドバイスしたが、本人は日本語コースの改善、特にテキスト作りを任期中に成し遂げたいと抱負を語っている。

なお、今後もC/Pと隊員との協力関係に対する不安は払拭できず、選択科目しか開講していない同校への派遣は原則として打ち切るという事務所の判断もあり、田中隊員の後任派遣は現在要請されていない。後述する日本語教師の派遣戦略に基づけば、同校は南部の拠点として派遣する意義はあると思われ、今後も大学の日本語教育実施体制を見ながら、派遣の可能性を引き続き検討しても良いのではないかと考える。

4　今後の日本語教師隊員派遣にあたって

今回の調査結果を踏まえ、今後のタイ国への日本語教師隊員派遣の方向性について、以下のとおり所感を述べたい。

4－1　全体的な派遣方針

地方における日本語教育の発展を念頭に置いた派遣

タイ国における日本語教育において、地方でのタイ人日本語教師の確保が難しく、その育成が課題となっていることは調査結果において述べたが、そのような状況下、これまでタイ各地方において日本語教育に取り組んできた協力隊員の活動意義は大きい。今後ともこれまでの流れを受けつつ、地方の拠点となり得る配属先への派遣を行うことが、地方における日本語教育を促進し、ひいてはタイにおける日本語教育の発展に貢献するものと思われる。

また、地方に対する協力については、国際交流基金も今後積極的に行う意向であり、地方での日本後教師勉強会の活動支援や地方巡回指導等を行っていく方向である。隊員がこれらの活動に積極的に参加し、連携した協力を行っていくことは、隊員配属先だけでなくより広く地方の日本語教師育成に貢献できる方法と思われる。

対象とする課程

タイ人日本語教師の育成にあたっては、教師養成を目的とした高等教育機関（大学）の主専攻課程への協力が直接的であり、今後も継続したい。ただし、主専攻開設校への協力は国際交流基金が中心となって行われてきた経緯があり、むしろ主専攻課程開設までの過程である副専攻課程への協力が手薄になっている状況も考慮すべきである。

よって、地方３６校あるラチャパット大学副専攻課程へ焦点をあてた現行の協力は、地方での日本語教育への貢献、及び主専攻開設・整備までを視野に入れた副専攻課程の充実という２つの意義があり、今後も継続したい。

派遣先

上記のとおり地方の高等教育機関を中心に隊員派遣を行う。地方の拠点校選定にあたっては、タイ政府側意向及び国際交流基金の方針等を参考にする。

（ａ）総合大学
質の高い日本語教師の確保が難しい地方において、協力隊員が活動する意義は大きい。ついては地方拠点校への派遣を中心に隊員派遣を継続する。なお、主専攻開設校で、コース整備が進み、隊員がマンパワー的な存在になりつつあり、大学が独自に日本人教師を雇用することができる場合、隊員派遣は行わない。

（ｂ）ラチャパット大学
シニア隊員をORICへ派遣し、ORICと各校の連携を図りながら、ラチャパット大学全体の日本語コースの充実を図る。なお、現状として、選択科目しか開講していない学校に対しては派遣を打ち切り、今後の発展の可能性が高い副専攻課程の開設校に派遣を

限定しているが、副専攻のみにこだわることはかえって視野を狭めかねない。最終的には主専攻整備までを目標に置きながら、ラチャパット全体の日本語教育の発展に協力する。

派遣人数

一般隊員については、地方の拠点校を中心にした派遣という方針案に基づき、具体的な派遣計画案を作成した結果が別紙のとおりであり、隊員総数の２０％程度の派遣は今後も視野に入れたい。

４－２　シニア隊員の派遣について

ラチャパット大学全体の日本語コースの充実を図るためには、シニア隊員をラチャパット大学本局へ派遣し、本局と各校の連携を図ることが必要不可欠と考える。

活動内容は以下のとおりとすることが望ましい。

派遣条件

実務的な活動を共に行うことが可能であるカウンターパートを１名必要とする。

資格要件

日本語教師隊員経験は必要不可欠と考える。

業務内容

本局及び各校との連携の推進（各種連絡会議の開催等）。
ラチャパット大学における日本語教育の現状調査・問題点の指摘。
主に副専攻課程におけるカリキュラム、教材の改善、整備について助言・指導。

今後の課題

ORICへは既に民間派遣によりアドバイザーとして日本人専門家が配置されており、シニア隊員を派遣する際は、同専門家との位置付けの違いを明確にする必要がある。また、ORICの中で隊員が立場的に宙に浮かないよう、組織内のラインや日常的な業務について、予め明確にする必要がある。

今後の日本語教師隊員の派遣計画（案）

1　東北部：コンケン大学人文社会学部・ウボンラチャタニ大学

東北部における総合大学は両校のみであり、互いに連携を取りながら地域拠点校となる可能性が高い。

2　東部：ブラパー大学

東部における唯一の総合大学。

3　南部：プリンスオブソンクラー大学パッタニー校

南部総合大学の中で唯一の主専攻開設校。巡回指導時に隊員派遣要請があったもの。日本語教育に対する取り組みの姿勢はしっかりとしており、南部の拠点校となる可能性も見受けられるため、隊員派遣を前向きに検討したい。

：ラチャパット大学ソンクラー校

副専攻開設準備校。プリンスオブソンクラー大学パッタニー校とも連携しながら、今後の協力を展開したい。

4　首都近郊：モンクット王工科大学

これまでの経緯も踏まえ、主専攻が軌道に乗るまでの継続的な協力が必要と思われる。

：シラパコン大学ナコンパトム校

今回の調査団により、コース整備が進み、他の日本人教師の雇用も可能であることが確認できた。今回の派遣で終了したい。

：ラチャパット大学各校（アユタヤ・主専攻準備、テープサトリ・副専攻、チャチュンサオ・副専攻、カンチャナブリ・副専攻）

現在は首都近郊への派遣が多いが、今後のシニア隊員の活動により、他の副専攻開設校や副専攻準備校から要請があがった場合は地方の日本語教育の発展の可能性を見つつ、前向きに検討する。

以上

タイ国日本語教師隊員派遣（81～99）

1　大学庁・総合大学（10機関11学部）

	配属先	81	82	83	84	85
1	ﾌﾟﾘﾝｽｵﾌﾞｿﾝｸﾗｰ大学ﾊｼﾞｬｲ校	井上恭子		石川公子		今野裕晨子
2	ﾌﾟﾘﾝｽｵﾌﾞｿﾝｸﾗｰ大学ﾊﾟﾀﾆ校					中嶋薫子
3	ｺﾝｹﾝ大学人文社会学部	藤岡小夜子		安藤嘉代		鶴田厚子
4	ｺﾝｹﾝ大学教育学部					
5	ｷﾝｸﾞﾓﾝｸｯﾄ工科大学		谷川淳子		山本真理子	
6	ｼﾗﾊﾟｺﾝ大学ﾅｺﾝﾊﾟﾄﾑ校					
7	ｼｰﾅｶﾘｰﾝｳｨﾛｰﾄ大学ﾋﾟｻﾇﾛｰｸ校（後、ナレースワン大学）					小山秀人
8	ｼｰﾅｶﾘｰﾝｳｨﾛｰﾄ大学ﾊﾟﾄﾑﾜﾝ校					
9	ﾌﾞﾗﾊﾞｰ大学					
10	ﾗﾁｬﾓﾝｺﾝ工科大学ﾁｪﾝﾏｲ校					
11	ｳﾎﾞﾝﾗﾁｬﾀﾆ大学					

1　大学庁・総合大学（１０機関１１学部）

	配属先	86	87	88	89	90	91
1	ﾌﾞﾘﾝｽｵﾌﾞ ｳｪｰﾙｽ大学ﾊｼﾞｬｲ校	今野裕里子	森下明子			畑　智恵子	
2	ﾌﾞﾘﾝｽｵﾌﾞ ｳｪｰﾙｽ大学ﾊﾞﾀﾆ校	中嶋薫子	小林美穂子		佐野浩子		
3	ｺﾝｹﾝ大学人文社会学部	鶴田厚子	伊藤早苗			玉島恵美	
4	ｺﾝｹﾝ大学教育学部					黒田実	
5	ｷﾝｸﾞﾓﾝｸｯﾄ工科大学	山本真理子	鈴木正子		大沼清美		
6	ｼﾗﾊﾞｺﾝ大学ﾅｺﾝﾊﾞﾄﾑ校	成田幸子			鎌田亮一		
7	ｼｰﾅｶﾘｰﾝｳｨﾛｰﾄ大学ﾋﾞｻﾇﾛｰｸ校（後、ナレースワン大学）	小山秀人		高崎三千代		佐々木雅子	
8	ｼｰﾅｶﾘｰﾝｳｨﾛｰﾄ大学ﾊﾞﾄﾑﾜﾝ校					佐藤史子	
9	ﾌﾞﾗﾊﾞｰ大学						
10	ﾗﾁｬﾓﾝｺﾝ工科大学ﾁｪﾝﾏｲ校						
11	ｳﾎﾞﾝﾗﾁｬﾀﾆ大学						

1　大学庁・総合大学（１０機関１１学部）

	配属先		92	93	94	95	96	97
1	ﾌﾞﾘﾝｽｵﾌﾞ ｿﾝｸﾗｰ大学ﾊｼﾞｬｲ校		畑智恵子 →					
2	ﾌﾞﾘﾝｽｵﾌﾞ ｿﾝｸﾗｰ大学ﾊﾞﾀﾆ校	真川由紀子 →	→	→	→			
3	ｺﾝｹﾝ大学人文社会学部	玉島恵美 →						
4	ｺﾝｹﾝ大学教育学部	黒田美 →	→	白木愛 →	→	→	白鳥文子 →	→
5	ｷﾝｸﾞﾓﾝｸｯﾄ工科大学	大沼清美 →			大槽幸子 →	→	→	沼田恵美
6	ｼﾗﾊﾞｺﾝ大学ﾅｺﾝﾊﾞﾄﾑ校		森川和子 →	→ 石井由美 →	→	→ 内山千尋 →	→ 菱原千草 →	→
7	ｼｰﾅｶﾘｰﾝｳｨﾛｰﾄ大学ﾋﾞｻﾇﾛｰｸ校（後、ナレースワン大学）	佐々木雅子 →	→	→ 木村ゆかり →	→			
8	ｼｰﾅｶﾘｰﾝｳｨﾛｰﾄ大学ﾊﾞﾄﾑﾜﾝ校	佐藤史子 →	→	→				
9	ﾌﾞﾗﾊﾞｰ大学					松井智美 →	→	藤田裕子
10	ﾗﾁｬﾓﾝｺﾝ工科大学ﾁｪﾝﾏｲ校					米口徹 →	→	→
11	ｳﾎﾞﾝﾗﾁｬﾀﾆ大学					幅喜代美 →	→	→

1　大学庁・総合大学（１０機関１１学部）

	配属先	97		98			99		
1	ﾌﾟﾘﾝｽｵﾌﾞ ｿﾝｸﾗｰ大学ﾊｼﾞｬｲ校								
2	ﾌﾟﾘﾝｽｵﾌﾞ ｿﾝｸﾗｰ大学ﾊﾟﾀﾆ校								
3	ｺﾝｹﾝ大学人文社会学部								
4	ｺﾝｹﾝ大学教育学部	白鳥文子 →		→					
5	ｷﾝｸﾞﾓﾝｸｯﾄ工科大学	沼田恵美 →		→			→	後任要請中	
6	ｼﾗﾊﾟｺﾝ大学ﾅｺﾝﾊﾟﾄﾑ校	瀬原千草 →		→			後任要請中		
7	ｼｰﾅｶﾘｰﾝｳｨﾛｰﾄ大学ﾋﾟｻﾇﾛｰｸ校（後、ナレースワン大学）								
8	ｼｰﾅｶﾘｰﾝｳｨﾛｰﾄ大学ﾊﾟﾄﾑﾜﾝ校								
9	ﾌﾟﾗﾊﾞｰ大学	藤田裕子 →		→			→	後任要請中	
10	ﾗﾁｬﾓﾝｺﾝ工科大学ﾁｪﾝﾏｲ校	米口徹 →	→						
11	ｳﾎﾞﾝﾗﾁｬﾀﾆ大学	福富代美 → 平岩ゆか →		→			→		

2　教育省・中等教育（７機関）

	配属先	81			82			83			84			85		
12	ﾎﾞｰｹｯﾄﾋﾞﾑｸ職業教育校				植木律子	鈴木ゆかり									松村みか	
13	ﾁｪﾝﾏｲ技術職業高等専門学校										田島裕子					
14	ﾀｳｨﾀﾋﾞｾｯｸ高校															
15	ｻｲﾊﾞﾗﾔﾗﾝｽｲﾄ高校															
16	ﾜﾝｸﾗｲｶﾝｳｫﾝ高校															
17	ｾｯﾀﾌﾞｯﾄﾊﾞﾝﾍﾞｰ高校															
18	ﾌﾞﾗｶﾅﾝｸﾞﾋﾞﾀﾗﾔｲ高校															

2　教育省・中等教育（７機関）

	配属先	86			87			88			89			90			91	
12	ﾎﾟｰｸｯﾄﾋﾞﾑｸ職業教育校	松村みか																
13	ﾁｪﾝﾏｲ技術職業高等専門学校																	
14	ﾀｳｨﾀﾋﾞｾｯｸ高校							押元直美						坂元淳子				
15	ｻｲﾊﾞﾗﾔﾗﾝｽｲﾄ高校													宮下由美子				
16	ﾜﾝｸﾗｲｶﾝｳｫﾝ高校																	
17	ｾｯﾀﾌﾞｯﾄﾊﾞﾝﾍﾞｰ高校																	
18	ﾌﾞﾗｶﾅﾝｸﾞﾋﾞﾀﾗﾔｲ高校																八田智子	

2　教育省・中等教育（7機関）

	配属先		92	93	94	95	96	97
12	ﾎﾟｰｹｯﾄﾋﾞﾑｸ職業教育校							
13	ﾁｪﾝﾏｲ技術職業高等専門学校							
14	ﾀｳｨﾀﾋﾞｾｯｸ高校	坂元淳子	→	山田繁子 →	→	→		
15	ｻｲﾊﾞﾗﾔﾗﾝｽｲﾄ高校	富下由美子 →						
16	ﾜﾝｸﾗｲｶﾝｳｫﾝ高校			岩崎全人 →	→	→	→	
17	ｾｯｸﾌﾞｯﾄﾊﾞﾝﾍﾞｰ高校			大久保美子 →	→	→		
18	ﾌﾞﾗｶﾅﾝｸﾞﾋﾞﾀﾗﾔｲ高校	八田智子 →	→	→				

2　教育省・中等教育（７機関）

	配属先			98			99		
12	ﾎﾞｰｹｯﾄﾋﾞﾑｸ職業教育校								
13	ﾁｪﾝﾏｲ技術職業高等専門学校								
14	ﾀｸｨﾀﾋﾞｾｯｸ高校								
15	ｻｲﾊﾞﾗﾔﾗﾝｽｲﾄ高校								
16	ｳﾝｸﾗｲｶﾝｳｫﾝ高校								
17	ｾｯﾀﾌﾞｯﾄﾊﾞﾝﾍﾞｰ高校								
18	ﾌﾞﾗｶﾞﾝｸﾞﾋﾞﾀﾗﾔｲ高校								

3　教育省・ラチャバット大学（１０機関）

	配属先	81			82			83			84			85		
19	カンチャナブリ校															
20	プーケット校															
21	チャチュンサオ校															
22	ウタラディト校															
23	チャンタラカセーム校															
24	ナコンシータマラート校															
25	アユタヤ校															
26	チェンマイ校															
27	ソンクラー校															
28	チープサトリ校															

3　教育省・ラチャバット大学（１０機関）

	配属先	86			87			88			89			90			91	
19	カンチャナブリ校															大神浩子	→	
20	プーケット校																北本周子	→
21	チャチュンサオ校																	
22	ウタラディト校																	
23	チャンタラカセーム校																	
24	ナコンシータマラート校																	
25	アユタヤ校			尾崎和代	→			→		竹田幸子	→			→			角津さゆみ	→
26	チェンマイ校			竹村浩治	→			→			→	三浦義家	→	→			→	
27	ソンクラー校																	
28	チープサトリ校																	

3　教育省・ラチャバット大学（１０機関）

	配属先		92	93	94	95	96	97
19	カンチャナブリ校	大神浩子		奥野由美子		星井直子		
20	プーケット校	北本周子					田中いち	
21	チャチュンサオ校		木本時美恵					
22	ウタラディト校					原田美由紀		
23	チャンタラカセーム校						安部愛子	
24	ナコンシータマラート校						見上直子	
25	アユタヤ校	角津さゆみ			村松千恵		神田陽子	石川薫
26	チェンマイ校		飯塚道子		内山千尋			
27	ソンクラー校				藤沢陽子		田中美紀	
28	チープサトリ校							

3　教育省・ラチャパット大学（１０機関）

	配属先			98			99		
19	カンチャナブリ校	曼井直子		森千枝見					
20	プーケット校	田中いち							
21	チャチュンサオ校	見上直子		清田薫					
22	ウタラディト校	原田美由紀							
23	チャンタラカセーム校	安部愛子							
24	ナコンシータマラート校								
25	アユタヤ校	梅田陽子 石川薫						後任要請中	
26	チェンマイ校								
27	ソンクラー校								
28	チープサトリ校			園田智子					